

最終成果報告書

報告者氏名：吉野晃子

所属：松江市立古志原小学校

記録日：平成 27 年 2 月 22 日

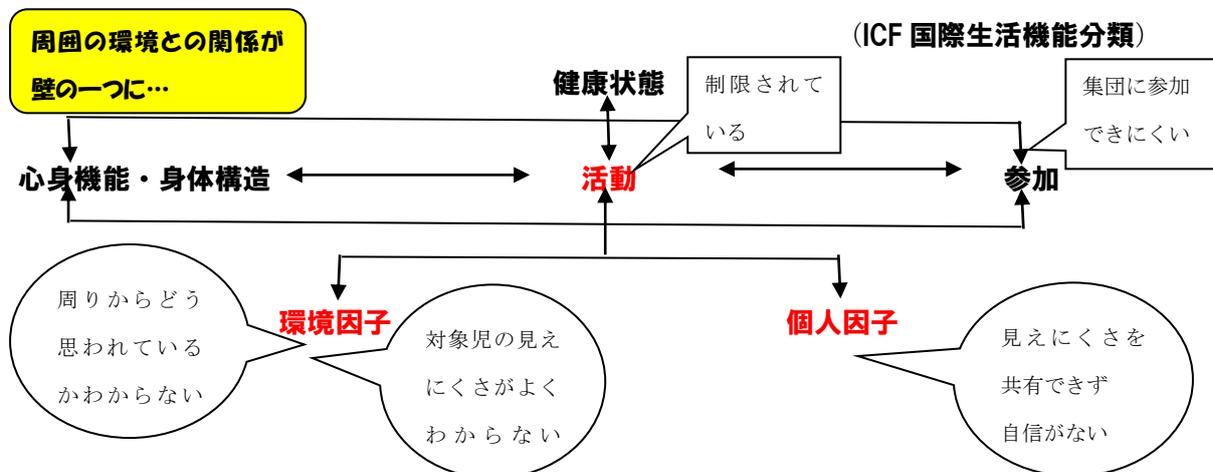
【対象者の情報】

○学年 小学校 3 年

○障害名 弱視

○障害と困難の内容

- ・ 第一次硝子体過形成遺残により、中心部の欠損・眼振があり、視力は左右共に 0,07 である。
「見る」という入力のためには、右目を字にかなり近づけるか、視覚補助機器を必要とする。
- ・ 視覚情報入力に時間がかかるため、その後の思考や作業にはさらに時間を要する。
- ・ 弱視学級に在籍していることで、同学年との友達の触れ合いが少なく、気後れしたり自信をなくしたりすることが多い。



【活動目的】

○主題「みんなと違う学び方をする私は、みんなからはどう見えるのかなあ…

～視覚障がいのある児童の自己理解と周囲との関係を考える～

○当初のねらい

「見る」ために、みんなの中で自分から視覚補助機器を使うこと

このプロジェクトが終わっても、対象児の「ワンド」が残るようにするには、「弱視を補うために視覚補助機器を使うという、人とは違う学び方」を周囲に認めてもらうことが必要である。そのことと同時に、対象児自身が周囲と一緒に自分のことを考え、視覚補助機器の必要性とその良さを実感していくことが何より望まれる。この両方が相互に作用して初めて「見える」ではなく自分から視覚補助機器を使って「見る」という能動的な視覚情報入力を行っていくことができると考える。

○実施機関 平成 26 年 4 月から平成 27 年 2 月

○実施者 吉野晃子

○実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

(ア) 対象児の事前の状況

- ・昨年までは、交流学級で算数を一緒に学習しており、単眼鏡を使用していた。しかし、たびたび使うのがやや面倒なことや、一人だけ違う学び方をするについて周りの子の視線が気になるために、見えなくても我慢していることも多かった。
- ・今年度は算数だけでなく、理科と社会も交流学級で学習することとした。しかし、まず視覚情報を入力してから作業を行うために時間がかかり、他の児童から遅れを取ることが気になっていた。
- ・昨年半ばまでは交流学級でも打ち解けられず、言葉を発することがなかった。周囲も本児に気を遣っていたがどうしてよいのかわからなかった。発表する時は涙が出ることも多かった。
- ・周囲の子ども（主に交流学級の児童）は、対象児が自分たちとは違う学級に在籍していることはわかってはいたが、それがなぜなのか、また対象児は何が難しいのかをはっきりとは知らないままに過ごしていると思われた。その理由として対象児が眼鏡等をかけていないことや、日常の動きが特に不都合なくできていることなどから、対象児の弱視の状態がピンとこないことによると考えられた。
- ・対象児は、昨年度までは SCT（文章完成法）で自分のことを聞かれても「わからない」と答えることが多かった。また、自分の目のことについて口に出すことを好まなかった。
- ・上記のように交流学級では大人しいが、自学級に帰るととてもお喋りで行動的になる姿があった。気持ちが解放されていると捉えると共に、何かしら歪みのようなものも同時に感じられた。

(イ) 活動の具体的内容

(1) “視覚補助機器を使う” → 学習について

- ① 交流学級での学習時に、iPad を机にホルダーで取り付けて『カメラ』機能で撮影したり、拡大機能のある『明るく大きく』アプリ を使いながら学習したりする
- ② 習ったローマ字を使い、自分でアプリをダウンロードするプロセスをたどる



『明るく大きく』で見る



明るく大きく



ローマ字でアプリを検索

(2) “みんなの中で” → 周囲からの理解について

- ① 交流学級…日常の授業の中で対象児の使う視覚補助機器をクラス全体でも使い、対象児や視覚補助機器が主役になる機会を設ける

6月と1月に定点調査としてクラスの児童にアンケートを行う



拡大読書器



日常の授業で拡大読書器を使用

Aさんはどうしてそよかせ学級にいますか？
Aさんが勉強の時にくふうしていることを何か知っていますか？

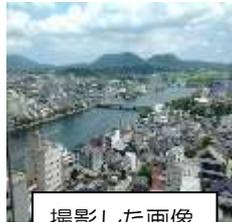
アンケートの一部

② 同学年 …社会の校外学習時に、対象児が iPad で動画を撮影し、その画像を振り返り学習で使う

学年で取り組む校内音楽会の練習時に、対象児が iPad で動画を撮影し、その画像を学年全員で見て修正箇所等を考える



対象児が写真や動画を撮影



撮影した画像



振り返り学習で画像を再生する対象児



練習風景を対象児が撮影



学年で映像を見る



修正箇所を見つける

③ 4年生 …総合的な学習で学年4クラス全員に理解学習の授業を行い、対象児のことを伝えたり、拡大教科書や視覚補助機器を実際に見てもらったりする



100人への授業

- ・対象児の身体的な困難について理解してもらいたい（違い）
- ・その上で、補助機器を使いながら自分と同様に頑張っていたり、夢を持ったりしていることを理解してもらいたい（同じ）

授業のねらい

④ 全校 …校内音楽会で理解啓発を兼ねた発表を行う

音楽劇「ありのままに」…対象児の台詞

☆「もう、そんなに遠くにブロック置いたら私見えんわ」

→自分の見えにくさを台詞として伝える

☆「私は、iPad や単眼鏡でしっかり見ます」

→人とは違う学びの手段を台詞として伝える



台詞として「全校に宣言する」

(3) “自分から” → **自己理解について**

- ① iPad と単眼鏡での作業所用時間を測定しそれぞれの機器の特徴を考える
- ② SCT（文章完成法）や SimpleMind アプリに自分の思いを表現していく
- ③ 視覚補助機器を使用している A さんを取り巻く周囲の状況や表情を、もう一台の iPad で写して対象児に見せていく
- ④ 交流学級や校内からの手紙を読み、返事を書く



視写にかかる時間を測定



SimpleMind アプリに自分の気持ちを書く



(ウ) 対象児の事後の変化

この活動のわらい

「見る」ために、みんなの中で自分から視覚補助機器を使うこと

自分から（自己理解について） → OK

みんなの中で（周囲からの理解について） → OK

視覚補助機器を使う（学習について） → OK

このことにより、「活動への制限」がなくなった

学習について

去年は交流学級で発表ができなかったが、今年は発表が大好きになった

単眼鏡で黒板や指導者を見ていた時とは違い、ホルダーに取り付けた iPad を使うことで両手が自由になった。かつ、より多くの視覚情報が一度に入るようになった。その結果、算数に対する理解や意欲が増ただけでなく、対象児の課題の一つだった処理速度の遅さも解消に向かった。

「入力」が保証され、「表出」ができるようになったことで、もともと高かった「思考」がより進んだと考えられる。

周囲からの理解について

視覚補助機器を自学級や交流学級以外でも使うことができるようになった

交流学級や同学年、4年生、そして全校から多くの感想や手紙をもらったことで、自分の弱視への理解や視覚補助機器の必要性、それらを使った違う学び方を受容してもらっていることが確認できた。

《事例：3年生校外学習》

市内一高いビルからの景色も対象児にはよく見えない。しかし、iPad のカメラ機能を使い撮影をすると、その後にくらでも拡大して見ることができる。本児は事前の学習で学んだ景色を実際に「見る」ことができ、とても喜んでた。また、ビデオ撮影することは同級生に話をしておいたので、当日は撮影する本児の横にやってきて「こっちの方向にこれがあるから撮るといいよ」などと自主的にサポートしてくれる子どもが現れ、本児の表情も明るく、声も大きくなってた。

担任は常々「A さん（対象児）のおかげでこのクラスはいろいろ便利なものが使えていい勉強ができるよね」とクラスの子どもたちに話している。この映像を見ながら振り返ったことで、クラスの子どもたちはとてもたくさんの振り返りカードを書くことができ、担任を驚かせた。

対象児をサポートしてくれた子ども達も「僕も教えたよ」「誰々くんの声が入ってる」などと言いながら喜んで画面を見ていた。



たくさんの振り返りカードが書けた

《事例:4年生からの手紙》

Aさんとは一緒に掃除したことがあったけど、普通に見えるのかと思っていた。

自分と同じ人が当たり前じゃないんだと思った。今日は人のためだけでなく、自分のためにもなった。もっと頑張りたいです。

拡大教科書は見た目は同じだけど、中身は普通より文字が大きかった。iPadは黒板に書いてある字をカメラモードで写し、それを大きくして使っていた。

《事例・拡大読書器を使った交流学級の授業》

3年生になって始まった「理科」の学習。交流学級でハウセンカの小さな種を観察する際に、拡大読書器で種を映し出して拡大して見せた。ハウセンカの種はとても小さく、肉眼では観察が難しいのだが、拡大されたことで種のしわや毛までよく見ることができ、子どもたちは大喜びだった。同時に、対象児にとっては普段このようなサイズでないと見えにくいのだということも実感できたようで、「こんなに大きくせんと見えんの？」という声も聞かれた。

自己理解について

自分が変わってきたこと、そして自分の目のことについて、外に表出するようになった

今までは、自分のことについて人に語ることをしようとせず、尋ねられても「わからん」「だって…」で終わっていた。また、単眼鏡もあまり使おうとしなかった。

しかし、単眼鏡やiPadで作業所要時間を測ったり、周囲の様子をもう一台のiPadで見せたりする活動を続ける中で、「いろんなことができるようになってきた」と叙述したり、細かい手作業に時間がかかりうまくできない自分のことを「こうだから目の悪いのは嫌だわ」などと担任に向けて話したりするようになった。「話す」ことで「離す」ことができ、気持ちを調節し、共感へと向かう道が付き始めた気がしている。

また、携帯できる3つの視覚補助機器の特徴などを表にする作業を行った。このことにより、それぞれの視覚補助機器の特徴や必要性が実感でき、補助機器を使う覚悟もできてきたと感じる。

視覚補助機器の特徴

補助機器	いいところ	どんな時に使うか
単眼鏡	持っていくのがやりやすい	第2の目だからいつも使えるようにしとかんといけんよ」って盲学校の先生が言ってた
ルーペ	字にあてるだけだから簡単	本とかを机に置いて読む時
iPad	ホルダーに付けたら見ながら書けるし、みんなものぞいて教えてくれる	黒板を写す時や広いところを見る時 学校から帰る時

【報告者の気づきとエビデンス】

対象児が変容したことを裏付けるエビデンスについて、以下の4つの視点から述べていく。

- (1) 対象児や周囲の大人の言葉から
- (2) 交流学級のアンケートから
- (3) 周囲の子どもたちの言葉から
- (4) 対象児の行動から

(1) 対象児や周囲の大人の言葉から

事前の言動	取組後の言動
交流学級には算数しか行きたがらない	→ 「うちね、全部行ってもいいよ」 (対象児)
交流学級では喋らない	→ 「去年発表しなかった？信じられない」 (現交流学級担任)
視覚補助機器を使いたがらない	→ 「忘れんように持って行かんと」 (対象児)
見えないことによる気持ちの歪み	→ 「歪みがなくなりましたね」 (幼児からの盲学校巡回教員)
友だちが少ない	→ 去年は支援学級の男子同級生とお弁当を食べた 今年は交流学級の女子6人で「みんなと食べたよ」

このように、交流学級と自学級での言動の違いがほぼなくなり、交流学級でも自分を制御し過ぎることなく行動できるようになってきた。また、同性の友達が一気に増えたのも何より嬉しいことであった。

(2) 交流学級のアンケートから

アンケートは、6月と1月にまったく同じ内容で実施し、数値や質の比較を行った。

ここでは、その中からいくつかの項目について比較し、表にまとめた。

質問内容	6月	1月
Aさんはどうしてそよかぜ学級にいますか	目が悪いから等…70% わからない…30%	一生懸命勉強するため等…全員 わからない…0%
Aさんが勉強の時に工夫していることを何か知っていますか	知っている…60% 知らない…40%	知っている…73% 知らない…27%
AさんがiPadを使っていることをどう思いますか	うらやましいとはあまり思わない…64%	うらやましいとはあまり思わない…85%
iPadや拡大する機会をみんなで使おうと、どんないいことがありますか	大きく見える・見えやすい 面白い 等	字が大きく見えて勉強しやすい Aさんと勉強できていい 等

また、アンケートの最後には、自分の将来の夢やAさんへの自由なメッセージを書いてもらった。6月時にもAさんを応援する内容は多くあったが、1月にはさらに「わからないことがあったら聞いてください」とか、「Aさんはいつも工夫をしているのですごいなあといつもそんけいしています」「わたしはしょうらいようちえんの先生になりたいです。みんなで勉強がんばろうね」などの言葉が出てきている。

周囲の子どもの意識を質的に分析するにあたっては、

- ① 機器への興味（違い） → ② 相手への関心（違い）
→ ③ 頑張っていることへの共感（同じ） → ④ 自分への気づき（共に・多様に）

このような段階で周囲の理解が進むと想定しており、この基準に基づいて見てみることにした。その結果、6月段階では①や②の段階の記述が多かったが、1月では③が増えていた。また、④のメッセージもあった。Aさん（対象児）と自分との違いだけでなく、同じところも感じることでこそ、対象児の「違う学び方」はお互いの相互作用として受け入れられると考える。現在は③段階だが、今後の子どもたちの精神的な発達と共に、④に進んでいくように日常的な支援を進めていくことが必要だと思っている。

（3）周囲の子どもたちの言葉から

対象児は基本的には大人しい女兒である。そのこともあってか、昨年度までは交流学級にいても対象児のことが話題に上ることはほとんどなかった。

しかし、今年度は、対象児の姿が見えるとiPadの取り付けを手伝ってくれたり、現在の頁を教えてくれるなどのかかわりや、「Aちゃんいいな。私も使いたい」「こんなに大きくせんと見えんの」「算数よくできるね」など、対象児に関する言葉が増えてきた。

その上で、全校児童の中には、対象児の目のことを否定的に口にしたりした他学年の児童や、対象児がiPadを使うことを「ずるい」と言う下学年の児童もいた。その時に、交流学級の男児が「Aは悪くないわ、お前あやまれや」と詰め寄ってくれたり、上級生が「これはAさんの目の代わりだからね」と諭してくれたりした。子ども同士のかかわりの中で出てくる素の気持ちや言葉に対し、担任がいない所でも真正面から相手にかかわってくれる男児や上級生が出てきたことを嬉しく受け止めた。

（4）対象児の行動から

SCT（文章完成法）やSimpleMindアプリを使い、「書く」という方法で気持ちの表出やその変化を見ていった。その結果、例えばSCTでは、第17問目の「わたしがはずかしいとおもうことは」という問いに対し、

2年12月「いっぱいあります」

→

3年5月「ふつう」

→

3年7月「ありません」

と回答しており、自信がついてきたことがうかがえる。また、SimpleMindアプリの記述でも「どうしてそんなに発表できるようになったの？」との問いに対し「自分のiPadが来たからです」と入力していた。視覚補助機器のバリエーションが増えたことで学習や生活がやりやすくなったことを示していると考えられる。

その他の大きな変容として、自学級や交流学級以外でも iPad を持ちだして学校行事を自分から「見る」ことができるようになった姿がエビデンスとして挙げられる。校内音楽会で「単眼鏡や iPad でしっかり見ます」と学校内外に伝えたことで覚悟ができたのだろうか。



バスケット教室を見る



音楽会を見る



地域の行事で持ち出す

今までは「見えなくてもしょうがない」と思っていたのかもしれない。しかし、実際にこうやって補助機器を使うと「よく見える」ことが初めて実感できる。この思いを4年生からの手紙への返事に以下のように綴っている。

4年生の皆さん、お手紙ありがとうございます。～中略～私は iPad や単眼鏡があるとよく見えます。

【プロジェクトのまとめ・今後に向けて】

自分について「友達が増えたよ」「算数がむっちゃ得意だよ」と嬉しそうに話す対象児。視覚補助機器を使うという「人とは違う学び方」を、周囲が受け入れてくれたことで自分も受け入れることができるようになった。

子どもが学びを深めていくためには、まずはその場に安心して存在できることが必要である。つまり、人間関係の構築と、自分の情緒・所属への安定である。このことが保証されて初めて「違う形」にも「失敗」にもチャレンジできると思う。

今回のワンドプロジェクトによって、単眼鏡やルーペでは補い切れない部分を iPad が補助してくれた。また、iPad という「自分たちは持つことができないカッコいい機器」を対象児が使っていることへの憧れも含め、対象児への理解が進んでいった。このようなプロセスに支えられ、対象児は自らの身体機能の困難・そして周囲との関係という環境因子の困難の2つを乗り越えようとしている。

3年後の中学校ではより多くの「教科学習」が待っている。現在のように拡大教科書を使うとすれば、教科書や副読本の多さや厚さ・重さは対象児を苦しめることになるかもしれない。また、作業スピードがより求められることについても、対応できるのか心配がある。通学に関しても距離が遠くなる。歩いて安全に通うことができるのか、横断等の状況判断力もさらに養っていかなければならない。中学校との連携と共に、交番など地域への理解を拡げていかなければならない。そして何よりも、自分とは何か・どうしてこうなのかと思ひ悩む「思春期」という大きな山がそこにある。

大きくなったら看護師になりたいという対象児。その夢に向かうために必要なのは、我々周囲の大人が「対象児の未来（支援）予想図」を早くから描いていくことだと考える。そして、『発達段階に即しながら自分のことを考え、自己理解・他者理解を相互に繰り返す、生きるために必要な“ワンド”を自分のものとして使えるようになる』ことだと思っている。『誰かと一緒に自分のことを考え続け、互いに自分を肯定する』ための自己理解を今後も応援していきたい。